

《資料紹介》

肥後琵琶師 玉川教照関係資料

湯川 洋史

1. はじめに

本稿は令和5年3月に当館へ寄贈された肥後琵琶師玉川教照関係資料について紹介するものである。

本資料は、東京文化財研究所『肥後琵琶の伝承および関連資料の現状調査』において、「肥後琵琶資料(中山勝教氏)」と記された箱に収められた資料一式」と言及されている資料群である。

資料は、肥後琵琶レコード、玉川教照使用の撥、玉川教照肖像、熊本大演習記念番組である。このほかに、参考資料として、玉川教照実子から聞き取った教照の履歴、肥後琵琶保存会の配布資料などが綴じられた研究資料ファイルの寄贈も受けた。

以下、玉川教照の履歴と併せて、寄贈資料について紹介する。

2. 玉川教照について

以下の玉川教照の情報は、特段断りのない限り、寄贈者が教照の実子から聞いた情報をもとにしている。

玉川教照(本名:中山要)は明治23年(1890)熊本県宇土市に生まれ、昭和7年(1952)に病死した晴眼の琵琶師である。

明治35年ころ両親死去のため、鹿本郡川辺村中山家の養子となった。それから5年後、17歳で七城村にいた肥後琵琶師京山福しん(本名:宮本九造)に弟子入りし、肥後琵琶を学びはじめた。

その後、明治42年(1909)南関町にある玉川(堀)教順の石塔祝いに琵琶師が集まっ

た折、植木にいた玉川京学に弟子入りした。

明治45年ころには、玉川大月、照月、泰悦など弟子をとるようになり、大正3年ころには一座を組んだという。座長として一座を率いながら、筑後、大牟田、玉名、山鹿を中心に琵琶師として活動し、特に筑後では「肥後のかまさん」と呼ばれ、人気を博したと聞く。

こうした人気の後押ししたのか、昭和6年の熊本大演習においては、11月16日に記念ラジオに出演し、「敦盛出陣」を演じ、その翌年、昭和7年42歳の若さで亡くなった。

外題は「平家物語」や「筑紫下り」をはじめ、小説などを参考に自身で創作したものを語った。「忠臣蔵」や「曾我兄弟」、「山中鹿之助」、「猿飛佐助」などの歴史物および「西南戦争」や「日清戦争」、「日露戦争」など当時流行した戦記物などがあったというが、当時の台本や録音などは見つかっておらず、その演奏を聴くことはできない。

3. 寄贈資料について

(1) 撥

肥後琵琶の器楽的な特徴とその変遷については、薦田治子の研究に詳しい(注1)。

薦田によると、盲僧琵琶は延宝2年(1674)の「座頭盲僧諍論」の結果、当道座から盲僧へ出された禁令(「官位院号袈裟停止の事」)を契機に生まれた。禁令では当時流行の三味線の使用、浄瑠璃や平家の演奏といった芸能活動を禁止した。一方で、琵琶を用いた宗教行為は引き続き許された。だが、この琵琶も駒(柱)は打ち付けて固定するものとの制限があった。そのため、三味線同様どのような高さの音でも出すことができ、かつ連続的に音の高さを変えるためには柱を高くする改造を施すしかなかった。

撥については特に禁令で触れられていなかったから、そのまま転用したものか、肥後、筑前、豊前の盲僧たちは義太夫三味線の撥に近いものを使っていたのが確認されている。

今回寄贈を受けた教照の撥も、例に漏れず義太夫三味線の撥に近い形状をしている。材は柘植。法量は縦 225 mm、撥先 75 mm、持ち手 30 mm、持ち手厚さ 26 mm、撥先厚さ 9 mm である。一部細かなヒビやカケが見え、撥先には演奏による摩耗(使用痕)が確認できる。

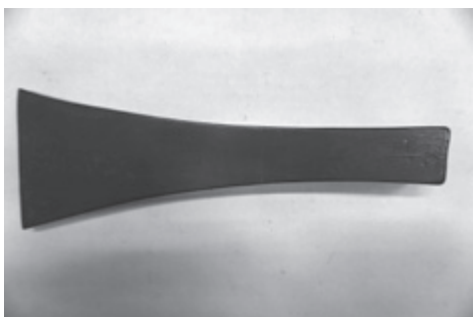


写真1 撥

(2) 玉川教照肖像

本資料は玉川教照が興行のチラシなどに使用した宣材用の肖像写真という。そのため、教照が一座を成した明治 47 年ころに作成されたものと考えられる。

写真 2 の通り、画面には正装した教照が写っている。資料自体は版材の銅板に木製の台が打ち付けられている。銅板は縦 55 mm、横 39 mm、厚さ 1 mm。台は縦 56 mm、横 40 mm、厚さ 22 mm である。裏に直径 6mm の丸穴が 2 つあり、鉛が詰め込まれて固定されている。

銅板画面上には細かな傷や汚れが見えるが、剥げなどの深刻な傷はなく、教照の姿を知ることには問題がない損傷程度である。

(3) 肥後琵琶レコード

本資料「発祥三百年周年記念盤 古浄瑠璃

の伝統 肥後琵琶」は肥後琵琶保存会が、昭和 50 年(1975)、コロムビアレコードに委託して製作したレコードである(注2)。A 面には玉川教悦(高本重信)による「羅生門」と西村教山(西村定一)による「一の谷」、B 面には玉川教演(山鹿良之)による「菊池くずれ」と京山上縁(田中藤後)による「都合戦筑紫くだり」と、4 人の演者による4題が収録されている。



写真2 玉川教照肖像(部分)



写真3 肥後琵琶レコード

(4) 陸軍特別大演習記念放送番組

本資料は昭和 6 年におこなわれた陸軍特別大演習を記念して放送された熊本放送局によるラジオ番組である。縦 188 mm、横 125 mm、右ホチキス止め全 16 ページの冊子装で、11 月 11 日から同 18 日までの間に放送された番組内容が書かれている。資料は一部ヤブレとヨゴレがあり、腐食によりホチキスが一部外れているが、全体的に美品で読む上での問題は

ない。

初日の聖駕奉迎と最終日の聖駕奉送は現場より中継が流れ、それ以外の時間は音楽や講演などが放送された。お国自慢の夕と題して、1日ごとに宮崎を除く九州各県が順番に、民謡や流行歌、俄や浮立、琵琶といった郷土芸術を披露した。

熊本県は16日の20時から21時5分まで放送され、ハイヤ節やおてもやん節などに続いて肥後琵琶が35分間放送されている。番組名は「肥後琵琶」、演目は「敦盛出陣」、演者は玉川教照である。

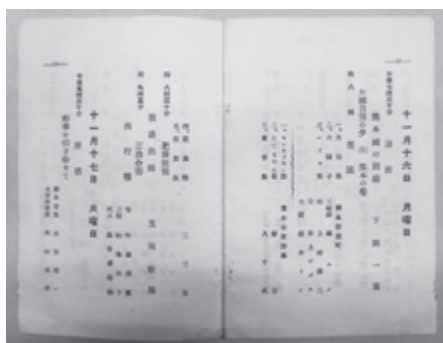


写真4 放送番組教照掲載ページ

4. おわりに

以上、教照関係資料について、その概要を述べた。教照自身については、『肥後琵琶』中の「肥後琵琶師」一覧に「中山教照」として掲載されているが、出身地や特色などは記されておらず、ほとんど情報がない人物だった(注3)。同一一覧には教照師匠の玉川教学の特色として、晴眼者を弟子にしたこと、興行をしたことが出ている。一座を成し、興行を教照がしたのは、師教学の影響かと思われる。

また、同書掲載の木村祐章「肥後琵琶概説」では、高本重信が3年修業した師「植木町鞍掛の玉川教ショウ」として名前が挙がっている(注4)。高本は今回紹介した実子よりの聞き取り履歴で弟子として記録されていた玉川泰

悦だから、履歴とは矛盾しない。

肥後琵琶は現状、当時を知る人々のほとんどが亡くなり、不明な点が多くある。今回の教照関係資料によって、その欠が補われたとは言い難い。だが、このような小さな記録や資料を集めていくことによって、はじめて分かることがあるのは確かである。

現在肥後琵琶の伝承者は限られていて、芸能として存続し続けることが難しい状況は続いている。資料収集や調査、研究を続けながら、時に発信し、今ある肥後琵琶という芸能を、未来へとつなげる手助けができるよう努めていきたい。

謝辞

資料をこれまで大切に保管され、この度当館を信頼してご寄贈くださった中山勝教氏に深く御礼申し上げます。

参考文献

肥後琵琶保存会編『肥後琵琶』1991
熊本市市民会館文化事業協会肥後琵琶再生事業検討委員会編『肥後琵琶を語る』2004
独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所 無形文化遺産部『「肥後琵琶の伝承および関連資料の現状調査」報告書』2023
安田宗生『肥後の琵琶師－近世から近代への変遷』三弥井書店 2001

(注1) 薦田治子「盲僧琵琶の誕生について－北九州に伝存する楽器資料の調査から－」『芸能史研究』196号 2012 ほか

(注2) 本レコードの作成年については、同資料に同封されていた「肥後びわ保存会第1号」発番付きの「肥後びわレコードの送付について」という書類日付による。

(注3) 肥後琵琶保存会『肥後琵琶』p.34

(注4) 上掲書p.10